Projets de paysage
Revue scientifique sur la conception et l'aménagement de l'espace

23 | 2020
Paysage, autonomie habitante et action locale dans le Japon contemporain : regards croisés franco-nippons

伊東豊雄　技術と社会

東北地方と瀬戸内海における2つの活動の交差的考察

Itō Toyō and the Issue of "Technical and Social Action" – Comparative Views of Two Actions in the Tōhoku and the Seto Inland Sea

Xavier Guillot グザビエ・ギヨ

Traducteur : Sakamoto-Marlin Maïko

Édition électronique
URL : http://journals.openedition.org/paysage/13747
DOI : 10.4000/paysage.13747
ISSN : 1969-6124

Éditeur :
École nationale supérieure du paysage de Versailles-Marseille, Institut national des sciences appliquées Centre Val de Loire - École de la nature et du paysage, École nationale supérieure d'architecture et de paysage de Bordeaux, École nationale supérieure d'architecture et de paysage de Lille, Agrocampus Angers

Référence électronique
Xavier Guillot **グザビエ・ギヨ**, « 伊東豊雄　技術と社会 », *Projets de paysage* [En ligne], 23 | 2020, mis en ligne le 30 décembre 2020, consulté le 10 février 2021. URL : http://journals.openedition.org/paysage/13747 ; DOI : https://doi.org/10.4000/paysage.13747

Ce document a été généré automatiquement le 10 février 2021.

Projets de paysage

伊東豊雄　技術と社会

東北地方と瀬戸内海における2つの活動の交差的考察

Itō Toyō and the Issue of "Technical and Social Action" – Comparative Views of Two Actions in the Tōhoku and the Seto Inland Sea

Xavier Guillot グザビエ・ギヨ

Traduction : Sakamoto-Marlin Maïko

> 二十世紀の芸術は、個人の独創性を最も重要な価値にすえてきました。それを抽象という言葉の下で、自然から切り離した地点でモノを考える方法を重視しました。私は、この2点を徹底的に問い直す必要があると思っています(...)。その本質は、何か集団の儀式のような祈りであり、人間であることの証の表現だったのではないか、という気がします。つまり建築の原初の姿は、共同で何かをつくり上げて、それを集団として崇め、またつくることが喜びでもあるという、共同性のあらわれだったのだと思います。それが個人的な営みになってしまったのは、近代以降でしょう。
> (伊東、2012年、p.172)

1 景観、住民の自立性、地域のアクションの概念を論じるために伊東豊雄の活動[1] を取り上げるのは、一見、矛盾するように思われる。伊東豊雄は、何よりもまず建物を設計し実現させる建築家として有名だからだ。1970年代前半に建築家としてのキャリアをスタートさせて以来、独特の建築エクリチュールを一貫して示し続け、日本のみならず世界でも高い評価を得てきた。最近の作品のひとつである台湾・台中国家歌劇院は、気鋭の構造エンジニア金田充弘の貴重な助力を得て実現させた大胆なデザインの大規模な公共建造物で、このような大規模建築プロジェクトを遂行させる伊東の実力を証明している。伊東はよって、その作家性の高い建築作品によって日本建築の威光に貢献する「アーシキクト・オトゥール(architectes auteurs)」の系譜[2]に属する。

2 上述の3つの概念を扱う際に著者が伊東の活動を選択した理由は、2010年代初頭以降に見られる伊東の職業的進化にある。この伊東の職業的進化の起点は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の際に、東北地方沿岸を襲い多くの住民の命を奪い住居を破壊した津波だった。ここから、直接の依頼やアイデアコンペにも、ましてやプログラムや予算にもよらない建築家の活動が始まった。それは自主的な活動であり、その目的は、津波で住居を完全に破壊された住民の差し迫った要望に応えることであった。この2つ目の取り組みが、2012年の第13回ベネチア・ビエンナーレ国際建築展の日本館での展示会「ここに、建築は、可能かArchitecture. Possible here? “Home-for-All”」において展示され、紹介された。この取り組みが提起する本質的な問いは、展示会のタイトルを見れば明らかだ。津波の被害地を復興させるという難題に直面した建築家に何ができるか？復興の構造と形式を決定する際に、建築家が持つ正当性はどのようなものか？津波の生存者の記憶の中にしかない、消滅してしまった「人々の生活の場」の再建に寄与する共有施設を、どのように設計すればよいか？

3 伊東の職業的進化において重要なもうひとつの自主的な取り組みは、瀬戸内海に位置する大三島での活動である。ただし、大三島での課題は、島の経済の低迷や人口減少と高齢化の問題に解決策をもたらすことが目的であり、東北地方の抱えていたそれとは異なる。しかしここでも、どのように建築家は、島の課題を解決するため、空間の実践者としての専門技能と知識を介してこの島で新たなライフサイクルを始動させるという複合的な任務に、地域の当事者たちとともにかかわることができるかという、建築家の役割と正当性が問われており、根底にある問題は共通していると言える。

4 これら2つの地域での伊東の取り組みを分析することによって、上に言及した語の概念を様々な次元において理解することができるのではないか。まずはこれらの語の概念を明確に定義したい。景観の概念は、景観を対象とする景観プロジェクトの概念とリンクする。本稿では、ブルーノ・ラトゥール(Bruno Latour)の研究を踏まえたピエール・ドナデュー(Pierre Donnadieu)とミッシェル・ペリゴール(Michel Périgord)による景観プロジェクトの定義を主に拠り所としたい。この2人の研究者にとって、

> 「景観デザイナーのプロジェクトは、非近代的な思考の推敲の場および時間として理解され、とりわけ造形芸術、生態学、地理学的、社会学的な知の交差点において、しばしばブリコラージュ的な、ハイブリッドな知を生産することが可能である。このハイブリッドな専門知は、プロジェクトの意図に、プロジェクトの場所の自然的、社会的な特性を織り込みながら、状況が変わる度に更新される。こうして科学者によって明らかになった専門知は、現実主義的アプローチréalistes（自然)と構築主義的アプローチconstructiviste（社会)の間で共有される」(Donnadieu et Périgord, 2005, p.216)。

5 この定義と上述した伊東の取り組みに採用されたアプローチの間には、多くの共通点が見られる。それは両者とも、生産される知識とモノの領域横断性に基づいた思考論理と、現代人の生活環境に適合したハイブリッドなモノの生産という非近代的思考を反映しているということである（Latour，2006)。住民の自主性と地域アクションの概念について我々が与える定義は、景観の概念を補完するものとなる。それは、設計者の専門的、上意下達的な言葉に異を唱え、地域住民の言葉と地域のスキルとノウハウを重視する選択と定義できる。

6 2010年代以降の伊東の立ち位置と二分化した活動については、伊東が書いた2冊の著書が証言している。これらの著作は、2つの地域での伊東の取り組みの動機を理解するための具体的な資料となる。『ここに、建築は、可能か』(Itô *et al.* 2013)と題された1冊目の著書は、上でも述べたように、同名の展示会の開催後に出版され

た。この著作の中で伊東は、岩手県陸前高田市の「みんなの家」の建設プロジェクトを振り返っている。自伝的要素の高い2冊目の著作『あの日からの建築』(Itô, 2014)では、東北地方での活動は、伊東の建築家としてのキャリアというより大きな枠組みの中で扱われている。これらの著作の交差的読解に加えて、2018年と2019年に著者が行った伊東豊雄本人へのインタビューを含むフィールドワークの成果が、2011年に始まる伊東の知的転換期を分析するにあたっての主な資料となる。

コモンズをつくるための住民との「交換」活動：地震からの復興の試み

7 最初の「新たな探究の地」は、東北地方太平洋沿岸である。2011年、東日本大震災の発生後、伊東は自らが手掛け、この年に開館10周年を祝うはずだったせんだいメディアテークの被害状況を確認するため、すぐに東北地方に駆け付けた。その際伊東は太平洋沿岸を訪れ、行政による応急的な仮設住宅対策を目の当たりにする。伊東によると、これらの対策はとても万全とは言えず、特に問題だったのは共用空間がないことだった[3]。このような状況の中、伊東は被災住民のための仮設住宅改善への課題解決に乗り出した。

8 伊東の最初の取り組みは釜石市で行われた。釜石市は岩手県に位置する人口3万4千人の小さな町で、津波により町の一部が破壊されていた。それは町全体を対象とした壮大な復興プロジェクトで[4]、その中には住民との協議によって設計される集合住宅と公共施設の建設も含まれていた。しかし、行政の設定する硬直的な建築基準に阻まれ、伊東の提案は後押しされず、結局採用されなかった。よってこの地方で伊東は、他の方法で複数の小規模プロジェクトを実現させることになる。

仙台市宮城野区の「みんなの家」

9 伊東豊雄は、仮設住宅の問題に日本で最初に取り組んだ建築家ではない。1995年に起きた阪神淡路大震災の際、坂茂がすでにその問題に取り組んでいる。すべての建築家が認めることだが[5]、坂茂の功績は、リサイクル可能な資材と従来とは異なる建築システムに基づいた建設方法を提案したことである。その目的は、建設のトータルコストの最小化と地域住民による設営の簡易化であった[6]。2011年の東日本大震災の際には、被災住民のための仮設住宅として、リサイクル可能資材を用いて共同空間を生み出すためにコンテナを積み重ねた斬新なデザインの住居コンセプトを考案した。ある意味、坂茂は目の前の問題にすぐに対処できるソリューションを編み出し、近代的な建築家として行動したと言える。

10 伊東は、同じ仮設住宅の問題に、坂茂とは違ったやり方で取り組んだ。伊東の目的は、すぐに入居できる住居の原型を作り出すことではなく、実現された、あるいは実現中の復興プロジェクトで考慮されていない住民の交流と社交の空間を提供することにあった。こうして伊東は、50戸ほどの仮設住宅の住民たちをつなぐ交流の場として、「みんなの家」のコンセプトを提案する。「みんなの家」第一号は、仙台市宮城野区に建設され、2011年10月26日に竣工式が行われた。釜石市で会得したプロセスを踏襲し、宮城野区の「みんなの家」の設計も、仮設住宅の住民たちと議論を重ねながら行われた。住民たちが建物の中に自分たちの文化指標を見出せるよう、彼らの要望を聞き出すことが議論の目的であった。最終的に、

畳敷きで薪ストーブを備えた木造の小さな建物が、日本の伝統的な建築法を用いて地元の工務店により丁寧に施工された。伊東がそれまで手掛けた設計で、日本の伝統建築やその住空間構成を取り入れたものはなかっただけに、その仕上がりは意表を突くものであった。伊東豊雄の設計と判断できるものは、「みんなの家」にはない。この点については伊東が自らの著作で何度も言及している通り、「宮城野区のみんなの家」のデザインには、利用者の空間への要望を重視した結果、建築家の「自我の消去」が具現化されている。また、小規模なプロジェクトであるがゆえに現場の職能者間の対話が促進され、仕上がりにはそのメリットが十分に活かされた。この「宮城野区のみんなの家」プロジェクトが、伊東のキャリアの二分化を示す最初の具体的な標識となる。

図1．宮城野区のみんなの家

出典：伊東豊雄建築設計事務所

図2. 宮城野区のみんなの家

出典：伊東豊雄建築設計事務所

図3．宮城野区のみんなの家

出典：Ito Toru

11 このプロジェクトについて、伊東はこう振り返る。

私が設計の仕事を始めてから、つくり手と住まう人がこれほど心をひとつにしたことはありません。近代合理主義のシステムに従えば、「つくること」と

> 「住むこと」の一致は不可能だと言われてきましたし、自分でもその境界をなくすことはあり得ないと考えてきましたが、この日、つくることと住まうことの境界が溶融していくのを実感しました。それはこうした特殊な状況において初めて実感できたのであって、通常の設計行為においてこのような関係が成り立つとは思いません。しかしたとえ一瞬であっても、こうした瞬間に立ち会えたことは、建築家としてこの上ない幸せでした(伊東、2012年、p.78)。

12 伊東は、上に引用した2つの著作で社会と建築家との間の深い溝についてしばしば言及しており、その主な要因は、資本主義経済の活動と期待にしたがい現代社会が形成されていることにあると指摘している[7]。この経済システムを支える市場の利益のためには、住民が本当に望むことに配慮する建築家より、個性的なデザインを展開するエゴセントリックな建築家が求められる。「宮城野区のみんなの家」はよって、伊東の今日の建築生産に対する本質的な批判を体現したものだと言える。その批判は、現在の建築生産が与する経済システムだけでなく、建築家の社会的責任にも向けられている。

陸前高田あるいは「再建」の課題

13 「宮城野区のみんなの家」の完成以降、東北地方の複数の自治体で、同様の復興プロジェクトが他の建築家により実行されたが、岩手県陸前高田市につくられた「陸前高田のみんなの家」は、様々な意味で異例の実験的プロジェクトであった。「みんなの家」のコンセプトにふさわしいプロジェクトを一緒に設計するために、伊東はこの機会に、乾久美子、藤本壮介、平田晃久の3人の建築家に声をかけた。複数の建築家による協同設計の形を取ったことで、前のプロジェクトに比べ設計のプロセスはより複雑化した。さらに陸前高田市出身で写真家の畠山直哉が参加し、現場の写真撮影に加えて、町の歴史を証言し、住民とのやり取りを仲介する任務を請け負った。

14 こうして、出された課題の建築的な解決策が、住民とともに時間をかけて練られていった。写真家・畠山の仲介と、とりわけ住民のリーダー的存在であった菅原みき子の参加によって、住民との対話はよりスムーズになった。数ヶ月にわたる暗中模索の後、「陸前高田のみんなの家」の建設場所として、その菅原により丘のふもとが提案され、建築資材として津波の塩害により一部が立ち枯れてしまった近隣の杉林から伐採した杉の丸太を使うことが決定した。これらの事項が決まってからは、プロジェクトは迅速に展開し、木の上に立てられたツリーハウスを思わせる居住部分が組み込まれた、高さ9.70メートルの複数の杉丸太で構成された構造をベースにすることが合意された。「宮城野区のみんなの家」とはまったく異なる垂直的な外観を有した「陸前高田のみんなの家」は、その建設場所と周辺との関係にもうひとつの特徴を持っていた。通常、住民の交流の場として仮設住宅の近くにつくられるはずの「みんなの家」が、ここでは仮設住宅と離れた場所に建設されたのだ。「陸前高田のみんなの家」の固有性はこの点、つまり近い将来様々な建物が建設される予定の場所に建てることで、この地域に存在していた「人々の生活の場」の再建に寄与する建物だということにある。また、垂直に伸びるこの建物は、遠方からも良く見えることで象徴的な役割を果たし、不文律の仕様書の要求にも応えていた。「陸前高田のみんなの家」は、伊東の表現を借りると、様々な点において「あの日からの建築」である。それは、設計者、施工者、住まう者の間に再び見出された暗黙の相互理解に基づいた住居の人類学的意味での「復活」を表現する建築である。その意味では、「陸前高田のみんなの家」は、20世紀の日本の近代化以前の建築実践に文化的、技術的根拠を見出す建設原理を称揚するマニフェストも同然だろう。

図4．陸前高田のみんなの家

出典：伊東豊雄建築設計事務所

図5．陸前高田のみんなの家

出典：伊東豊雄建築設計事務所

15 このように考えると、「あの日」は、我々の生活空間の整備に貢献してきた技術の進歩に対する社会の見方が一変した日だとも言える。というのも、伊東豊雄を東北地方に向かわせた大災害と、それを巡る議論に話を戻せば、多くのオブザーバーが一様に指摘したように、東北地方の住民たちは「自然」災害の被災者ではなかった。津波の人的、物的被害は、地球の生命サイクルに刃向かう力を技術に与えた近代主義的原理に基づき行われた開発整備の当然の帰結でもある。今日、これらの近代主義的前提の倫理性が、あらゆる次元において、とりわけ現代社会が地球資源の有限性と再生にかかる時間を無視し浪費的利用を続けていることとの関連で問われるべきだろう。

地域規模の長期的活動 - 大三島で展開された活性化プロジェクト

16 伊東豊雄の第二の探究の地は、瀬戸内海の大三島である。伊東とこの島との最初のかかわりは、篤志家・所敦夫の寄附による「ところミュージアム大三島」のアネックス設計の依頼であった。伊東にとってこのプロジェクトは特別な意味を持つ。設計当時、伊東は依頼主の所に、私塾「伊東建築塾」を設立し、そこで建築を教えたいと語った[8]。所はこの伊東のアイデアに賛同し、塾のためにミュージアムを使うことを提案した。それが今日の伊東豊雄建築ミュージアム(TIMA)であり、伊東豊雄と塾生たちによって大三島で実行された、または実行中の様々なプロジェクトの集会・教育・展示の場となっている[9]。

図6．大三島の蜜柑栽培

出典：**グザビエ・ギヨ**

図7．伊東豊雄建築ミュージアム(TIMA)

伊東豊雄が東京で設計したシルバーハット。現在は塾生の学習の場になっている
出典：グザビエ・ギヨ

図8. 伊東豊雄建築ミュージアム(TIMA) 内部

活性化のプロジェクトにかかわった住民たちの写真が展示されている
出典：グザビエ・ギヨ

図9．伊東豊雄建築ミュージアム(TIMA) で開催された大三島での活動を報告する展示会の様子

旧小学校のリノベーションプロジェクトの写真とデッサン画
出典：グザビエ・ギヨ

自律的・持続的な地域のエコシステムを、住民とともにつくる

17 大三島での活動の意義と伊東が用いた人的、物的資源について理解するためには、伊東の建築教育への取り組みと、現在の日本のアカデミックな建築教育に対する伊東の批判を吟味する必要がある。伊東は日本の大学での建築教育についてこう書いている。

> 「大学で設計教育をしていると、「コンセプト」が非常に抽象的で、現実の社会で建築をつくることへの実感を伴っていないと感じます。(中略)ひとりの社会人として自分が社会とどう関わっていくかという自覚も感じられない」(伊東、2012年、pp.94-103)。

18 この社会と建築の関係の再構築こそが、伊東の建築教育への取り組みの中心課題である。そのために必要なのは、フィールドワークを優先させ、当事者である住民との交流と共有の時間を重視することだ[10]。このように、社会と建築の関係に関して、大三島のプロジェクトにおいても東北地方と同じ活動理念を見出すことができる。しかしながら、大三島が抱える整備の問題は東北地方のそれとはまったく異なる性質を持つ。大三島の課題は、「みんなの家」の設計・建設プロセスに住民を参加させることではなく、経済低迷と人口減少により衰退の一途を辿っていた島の暮らしを活性化させることだった。こうして2011年以降、伊東と塾生により、3つの分野を軸にして様々なプロジェクトが展開され、島の住民の生活に働きかけている。

19 1つ目の活動分野は、食と島の農業資源と住民との関係にかかわる。かつて瀬戸内海の島々の重要な収入源であった蜜柑類の生産は、高齢化と人口減少によって衰退し、農園の多くは引き受け手もなく放棄されていた。さらに、主に小規模生産者で構成される島の蜜柑農業は、他の地方や外国産蜜柑との価格競争に勝てず、もはや採算の合う産業ではなくなっていた。しかしながら、蜜柑栽培用に世代を超えて引き継がれてきた急斜面の段々畑は、他の農業活動に転用できた。ここでの計画は、これらの蜜柑畑をブドウ畑に転用し、島の住民のために新しい経済活動を興すことだった[11]。2017年に初めてのブドウの収穫が行われたが、ここで生産されたブドウの品質を評価するには、ブドウの木が十分に成長する20年後まで待たなければならず、よってこの「大三島みんなのワイナリー」と名付けられたこのプロジェクトの客観的な評価にはまだ時間が必要である。

図10．大三島のブドウ畑

出典：伊東豊雄建築設計事務所

20 2つ目は観光で、民宿に転用されていた20世紀初頭に建造された旧小学校のリノベーションが中心課題となった。木造建築のこの建物は改修が必要な状態だったが、改修費を工面することは困難であった。しかし、国が進める地方創生の補助制度を使い、建物のリノベーションの実現と運営継続が可能になった。他の観光促進活動は宮浦地区において展開され、特に島の主要な神社である大山祇神社の参道の整備が行われた。人々はかつて宮浦港から参道を通って大山祇神社に参拝していたが、広島県尾道市から愛媛県今治市を結ぶ自動車専用道路「しまなみ海道」が2006年に開通したことにより、マイカーやバスで直接神社にアクセスできるようになり、それまで徒歩で行われてきた参拝の儀式的伝統は覆されてしまった。加えて、参拝客は神社の入口まで直接マイカーやバスで来るために、参道の両側に軒を連ねる商店で営まれてきた地元の経済活動はすっかり廃れてしまっていた。この参道の価値を高め、伝統的な徒歩での参拝を復活させるための活動が現在展開されている。

図11．大三島 憩の家と岩田健 母と子のミュージアム

出典：伊東豊雄建築設計事務所

21 3つ目の活動は、共同プロジェクトを通して住民たちの結束を高め、交流を促進させる意図を持つ。宮浦地区には、東北地方と同様の「みんなの家」がつくられた。ただし、東北地方の「みんなの家」プロジェクトとは異なり、大三島では新たに建物を建設するのではなく(島の空き家問題をこれ以上深刻化させるのは無意味であるため)、大山祇神社に通じる参道沿いにすでに存在する建物がリノベーションされた。「みんなの家」のほかにも青空市場の開催なども予定されている。これらの数々の小さな活動を介して、参道にある既存の建物に新たな命を吹き込み、宮浦地区を大三島の中心として再生させることが目的である。

22 以上の3つの分野における伊東の活動は、定量化・視覚化された目標のクリアのために予めスケジューリングされたプログラムに基づく従来の地域開発計画の視点に立つものではない。そのアプローチはむしろ、段階的な活性化のために島の住民たちを一連の小さな活動へ参加させることを目指している。最終的な目標は、人口減少と経済衰退に歯止めをかけるため、中期的視点に立って島の経済、社会、文化に資する新たな「地域のエコシステム」を創り上げることである[12]。

聖地・大三島を護る= 創る

23 2018年、大三島での伊東豊雄と伊東豊雄建築塾の塾生たちによる活動の進展を報告するために、東京のLIXILギャラリーで展示会が開催された。展示会のタイトルは「聖地・大三島を護る= 創る」である。展示会のカタログの表紙には、伊東の建築家としての活動を示す建築物ではなく、野菜畑の真ん中で3人の人物がシャベルで土を掘り起こしている写真が使われている。それは、住民による島の資源(食、人、無形の)の有効活用を促進させる伊東の活動を的確に表現するために、伊東が選んだメッセージとも言える。展示会のタイトルは、伊東の大三島を「護る」活動の根拠を明らかにするために聖地の概念が強調されており、この聖地の概念

は、人類学者の中沢新一が自著「アースダイバー東京の聖地ー」(講談社、2005年)の中で提示した次の3つの定義に準拠している。

> « (1)「結界」によって周囲から自立したシステムを持つ特別な地域であること » ; (2)「自然」に結ばれる回路を備えていること; (3) 単なる観光地でなく、人々がそこで生き生きとした活動をしていること »[13]。

24 たしかに語源的には、聖なるものとは、「社会と自然のシステム全体を疑問に付すことなしに評価されることを禁じられた(または評価が不可能な)もの」(Delbaere, 2017)であり、「隔離されたもの」である。このように、大三島の活性化活動に語る際に聖の概念に言及することは、この数十年の間に現代社会が島にもたらした様々な変化と、そのために島に生じた様々な不均衡のことを暗に指摘していると言える。大三島の最大の特性は、島であることにある。国の経済「発展」によってもたらされた経済的変動によって、その島嶼性によって聖性を保っていた大三島の社会と自然のシステムが疑問に付される日までは、自給自足によって島の均衡が保たれていたのだ。

伊東豊雄の両面的な知的/職業的軌跡の意義

25 近年の伊東は、緊急的な状況で課題に向き合わなければならなかった東北地方での活動よりも、大三島での活動に比重を置いており、伊東にとって重要な省察の場となっている。本稿の冒頭での伊東の著作からの引用でも分かる通り、伊東にとって、協同の設計実践には「共有」の概念が不可欠である。実は大三島で伊東が用いたアプローチは、伊東のキャリアにおいては初出のものではない。1971年に書かれた、当時完成したばかりの「アルミの家」についてのテキスト*"Designing the result of one's own warped thought processes* (設計行為とは歪められてゆく自己の思考過程を追跡する作業にほかならない)"(Ito, 1972)の中で、伊東は、設計に対する個人的な理論と実際の設計行為を結び付けることの妥当性に対する疑義について述べた上で、設計のプロセスを共有するには、むしろ住宅の発注者との対話を確立する必要があると主張している[14]。したがって、キャリア後期に行われた大三島での協働活動はある種の原点回帰とも言えるが、大三島での活動の特色は、島の規模に合わせたコミュニティづくりという、個人住宅とは異なるスケールの住空間にこの共有の概念を適用していることにある。

26 このような伊東の取り組みとアプローチが、日本と世界の建築実践の進化において代表的な趨勢だと言えるとすれば、どの点においてだろうか？伊東が、日本と世界の建築実践の進化にもたらした固有の貢献とは何か？これらの問いに答えるために、伊東のアプローチは、提唱者の個性の違いを超えて、少なくとも2つの重要な問題に関して合意している思想の共同体に与するという仮説を立てることができる。

27 1つ目は、参加型設計の実践についての問題である。日本では、利用者との対話を取り入れたこのような協働的な実践形態は目新しいものではなく、一般に、都市の居住地区の改良整備や公共施設の設計プロセスに適用される「まちづくり」がそれに当たる[15]。「まちづくり」は、フランスの参加型都市計画と類似した実践であり、アングロサクソン世界に由来する。今日、この参加型実践が、建築の進化のためにより高次の社会倫理を目指すという共通の目的のもとに、急速に普及している[16]。それは建築家の個人の利益より、社会の利益を優先させる実践である。ただし、「みんなの家」のケースが示す通り、建築家からすべての主体性が奪われる訳ではない。「みんなの家」のコンセプトを考案したのは伊東であり、それを、交流と共生の空間を再考する必要に迫られた状況に伊東が適用したのであ

る。ここで、伊東にこのような実践を可能にさせた特殊な事情にも言及しておきたい。独創的な作品で世界的に有名な建築家としての肩書がなければ、伊東が「みんなの家」を実現するための資金を得ることは難しかっただろう[17]。このことは、我々の社会が、我々が「社会的行為 l'agir　social」と呼ぶものを指向する専門家をどのように評価し、位置付けるかという問いを提起する。「社会的行為」とは、ここでは、利用者および市民社会と専門知識・技能を共有することにより連帯を目指した設計実践を指す。

28 今日、これらの「社会的行為」に向かう様々な実践形態が、幅広い議論の対象となっている。国際機関では、国際連合人間居住計画による国連ハビタット会議が、このような実践思想の潮流の代表的な主張の場として挙げられる。1996年にイスタンブールで開催されたハビタットⅡ会議以来、国連ハビタット会議は、かつて世界を分断していた南北の二元論を超えた国際的な枠組みにおける様々な協働的実践の発展のための優れた考察の場となっている。とりわけ2016年にエクアドルのキトで開催されたハビタットⅢ会議では、この協働的実践の考察をさらに深める嚆矢となったキト宣言 (Clos, *et al.* 2016) が採択された。今日欧州では、国連ハビタットとは異なる次元で、この潮流が「過渡期の都市villes　en　transition」運動として引き継がれ[18]、様々な共同体が自らの生活環境を改良していくための「プヴォワール・ダジール　pouvoir　d'agir」の促進という共通の問題 [19]についての議論が盛んに行われている。実際は、この運動はメディアによって取り上げられることが少ないため認知度が低い数多くの同様の運動の一例であるが、これらの運動の共通点は、公的権力と既成の整備規範によって規定された整備規則からの解放を目指した、市民解放のプロセスの様々な形態を示していることである。

29 フランスでは、建築家のパトリック・ブシャンが、そのオルタナティブな実践手法と、その理念を著作や講演を介して積極的に伝えようとする姿勢によって、参加型実践の代表的な擁護者として知られている。ブシャンは、自著"*Construire autrement* (オルタナティブに建設する)"(Bouchain, 2006)の中で、市民解放が実現されるには、「実行すべき行為を命令するのではなく、示さなければならない。やるべきことではなく、到達したい目標を伝えなければならない。」(p.65)と述べている。さらに彼はこう付け加える「使用者がそこに身を置き、手を加えて変えていけるよう建物をオープンなままにしておくことは、その建物の変容に使用者を関与させることで、使用者の建物への肯定的な評価を可能にするひとつの方法である。」 (p.81)

30 2つ目は、技術の進歩が空間プロジェクトの思想にもたらした影響と、人間空間を変容させるため技術に与えられた権限の問題である。20世紀の空間整備は、近代的な開発思考に基づいた、合理主義的な計画論に沿って行われた[20]。このような整備実践は、日本では、産業活動の発展と現在の都市圏の形成を推進するための大規模インフラストラクチャーの建設を目的とした「国土計画」の概念と対応する。地域の資源を活用したオルタナティブなモデルをつくることを目指す伊東豊雄と塾生による大三島での活動は、住民の地域への定着と、住民と地域資源の関係を再構築しようとする世界的な思想の潮流と通じている[21]。伊東が与するこの大きな思想の潮流の内部には、地域を都市化のプロセスにおける単なる媒介的空間としてしか見なさない計画的開発論理への本質的な批判が存在する(Guillot, 2016)。産業革命以降、人間の居住形態を変容させてきたのがこれらの計画的開発論理であり、20世紀はその到達点であった[22]。伊東が自著で述べたように、今日の課題は、自然から切り離された思考に基づくこれらの開発論理を再検討することである。ここでの自然とは、生命世界とその資源全体を指す。

31 この近代的開発思考の批判の文脈において、道徳哲学および政治哲学の分野の研究は、様々な社会的課題を理解し、新たな行動倫理を予測するために有益な知見を与えてくれる。カトリーヌ・ラレールとラファエル・ラレール(Larrère＆Larrère, 2018年)によると、道徳哲学および政治哲学の分野においては、2種類の技術的アプローチを識別できる。1つ目は、「作る(faire)技法」で、「それは(唯一無二の作品を作る)職人の技法であると同時に(大量生産の)産業生産技法でもある」。2つ目のアプローチは、それとは反対に、作らない。自然の力あるいは生物の力を使うか、もしくは期待された結果を得るために自然のプロセスに働きかけ、変化させる。パートナーと接するのと同様、自然に歩み寄るために多種多様な方法が用いられる。それは「作る技法(l'art du faire)」ではなく、「する技法（l'art de faire) 」であり、「を使ってする技法(faire avec)」である(Larrère, 2017 :29)。「作る技法」では、予め推敲された概念モデルにしたがってモノが作られるために、設計者(エンジニア)の意向を加工しやすい材料に「押し付ける」支配的なアプローチが採用される。一方、「を使ってする技法」では、その反応(または展開)が完全に予知できないモノ(または状況)を得るために、自然的環境の複雑性に応じた慎重で臨機応変な経験的アプローチが適用される。これら2つの行為のアプローチを通して、行為の手段と世界の複雑性とのかかわり方が異なる2つの技術文化を識別できる(Larrère, 2018 :226-227)。それらは2つの「技術的行為l'agir technique」[23]の文化であり、ラレール・ラレールがプラトンの『ティマエウス』から引用した、行為する2つの人物像によって表象される。1つ目の技術文化は、創造主・デミウルゴスによって世界創造を説明しようとしたときに哲学者が用いた職人(artisan)の人物像によって表される。それは職人の「工芸」文化であり、後には工業制手工業と工業となる。2つ目の技術的行為は、同じくプラトンから彼らが引用した「水先案内人(pilote)」によって引き受けられる。水先案内人は、羊飼いがヒツジの群れを御するように、船を操る (Larrère, 2017 :29)[24]。水先案内人は、ある意味では、建てる者と住まう者の間に見出された暗黙の相互理解の具現である。水先案内人の行為は、テクノロジー化と工業化の影響を受けない。建築実践においては、建造物の建設にかかわる職能集団内の各々にふさわしい立ち位置を与えることである。「これらの職能者は欠かすことのできない存在である。何故なら、彼らがいなくては建設できないからだ」パトリック・ブシャンはこう述べている。「「他者」は「私」とともに建設する者でもある。何故なら、建設することは集団的な行為であり、つながりを創ることであり、人間文化の表明だからだ」(Bouchain, 2006, p.48)。

結論

32 2つの「技術的行為」が存在する。それは世界に働きかける2つのアプローチである。今日の伊東の設計姿勢に、この2つの「技術的行為」を見出すことができる。建築技師としての最高度の専門知識と高額な建築費を使って、スティール、コンクリート、ガラスで構成される建物を設計し建設するとき、伊東は創造主のデミウルゴスである。前述のせんだいメディアテークのように、最近の数十年の間に伊東が実現させた建築の多くが、人工世界をコンセプト化し、実現させる伊東の能力の高さを示しているが、これらの建築に使用される資材には、それがたとえ自然要素のフォルムを人工的に美しく再現する目的であっても、地球の資源が使われ、資源の枯渇化を助長させている。一方、すでに「そこにあるもの」、つまり地域の住民のバイタリティと物的資源を活用して、「する」あるいは「してもらう」ことを目指し様々な仲介プロセスを指揮してきた前述の数々のプロジェク

トにおいて、伊東は水先案内人である。未曾有の大災害の影響を引き摺ってきた過去の10年間で、そして伊東のキャリアの後期において、伊東の知的軌跡において代表的なのはこの水先案内人としての活動である。伊東は、地域の規模で人々の住まいを考えるというオルタナティブな問題を探究し、同時にキャリアの出発点で見定めていた共有と協働に基づく設計実践の課題に再び取り組むことを選択した。

33 たしかに、1970年代から2000年代初頭まで、伊東豊雄の関心は主に都市に向けられていた。彼は、急激に発展する都市の中に、建築プロジェクトを構想する可能性を見ていた。儚さと軽さの美への省察を反映させながら建物を設計し、自らの建築を確立させてきた。東京は、伊東のインスピレーションの最大の源泉であり、貴重な実験の場であった。40年後の今、伊東を前進させるのは、現代社会のオルタナティブな解釈であり、建築家として社会にかかわっていくオルタナティブなやり方である。伊東が、自著において展開した東京に対する批判は明解である。伊東にとって今後重要なのは、都市集中のプロセスとは「真逆」のプロセスを考えること、つまり、大都市・東京の生産至上主義と消費主義の論理の外側で、地域の規模で空間的、人間的な価値を探究することである。

34 都市化への伊東の批判は、都市から遠く離れた場所で行われている伊東の取り組みを見れば明らかだが、もうひとつの政治的な議論へと伊東を引き寄せる。それは、人間居住の「都市中心主義」的アプローチ[25] から脱却し、地理学的、人類学的、生態学の多極的な次元において地域の問題を考えることを目的とした議論である。空間プロジェクトの問題もその射程に入るために、フランスでも、歴史の固有性と居住文化の違いに応じて、日本と同様の議論が進行している[26]。ただし、前述のような非近代的思考の観点からは、日本とフランスの空間プロジェクトの課題とアプローチは、本質的な点では一致する。つまり、空間とプロジェクトにかかわる様々な領域の知を細分化してきた近代的開発思考の規定的な枠組みから脱却し地域で活動することである。その目的は、地域のすべてのアクターと住民のコミュニティとともに専門知と技能の共有システムをつくり、共同プロジェクトにおける地域の自立をさらに推し進めていくことである。

本稿の執筆にあたり、写真の使用および日本語版のレビューをご快諾いただいた建築家・伊東豊雄氏と伊東豊雄建築設計事務所のおおたゆま氏に深く感謝申し上げます。

BIBLIOGRAPHIE

Alexander, C., Ishikawa, S. et Silverstein, M., *A pattern language: towns, buildings, construction*, New York, Oxford University Press, 1977.

Bonnin, P., Nishida, M, Inaga, S., *Vocabulaire de la spatialité japonaise*, Paris, CNRS Éditions, 2014.

Bouchain, P., *Construire autrement. Comment faire ?*, Arles, Actes Sud, 2006.

Clos, J., Senett, R., Barnett, R., Sassen, S., « Towards an Open City. The Quito papers and the new urban agenda », Quito, UN Habitat III Forum, 2016.

Contal, M.-H., « L'architecture comme agent d'émancipation des citoyens », dans Contal, M.-H. et Revedin, J., *Sustainable design 7. Vers une nouvelle éthique pour l'architecture et la ville/Towards a new Ethics for Architecture and the City*, Paris, Éditions Alternatives, 2019, p. 7-15.

Delbaere, D., « Comme au ciel. Le paysage et le sacré », *Les Carnets du paysage*, n° 31, Arles, Actes Sud, 2017, p. 5-1.

Donadieu, P. et Périgord, M., *Clés pour le paysage*, Paris, Ophrys, 2005.

Egg, A.-L., *Kinya Maruyama, Architecte workshopper, Le jardin étoilé, Paimbeuf*, Arles, Actes Sud, 2010.

Frey, P., *Learning from Vernacular: Towards a New Vernacular Architecture*, Arles, Actes sud, 2010.

Ganguilhem, G., *La Connaissance de la vie* (1952), Paris, Vrin, 1965.

Guillot, X., « Equité territoriale et *altermétroplisation* », dans Sery, J., et Saunier, F (dir.), *Ruralités et métropolisation. À la recherche d'une équité territoriale*, vol. 6, Publications de l'Université de Saint-Étienne, coll. « Espace rural et projet spatial », 2016, p. 260-269.

Guillot, X., « Espace rural et projet spatial : un défi pédagogique et professionnel à relever » dans Guillot, X. (dir.), *Espace rural et projet spatial. Réflexions introductives/stratégies pédagogiques*, vol. 1, Publications de l'université de Saint-Étienne, 2010, p. 12-17.

Itō, T, *L'Architecture du jour d'après* (*Ano hi kara no kenchiku, 2012*), traduit du japonais par Dartois-Ako, M. et Quentin, C., Bruxelles, Les Impressions nouvelles, 2014.

Itō, T., Inui, K., Fujimoto, S., Hirata, A., Hatakeyama N., *Architecture. Possible here? "Home-for-All"*, Tokyo, Toto Publishing. 2013.

伊東豊雄、あの日からの建築、東京、集英社新書、2012年。

Itō, T., « Designing the result of one's own warped thought processes », *The Japan Architect*, Shinkenchiku-sha, February 1972, p. 100-101.

Landel, P.-A., « Entre politique publique et action publique : l'ingénierie territoriale », dans Faure, A. et Négrier, E. (dir.), *Les Politiques publiques à l'épreuve de l'action locale. Critiques de la territorialisation,* Paris, L'Harmattan, coll. « Questions contemporaines », 2007.

Lardon, S. et Pernet, A., « Introduction. L'ingénierie territoriale à l'épreuve des pratiques de conception », dans Lardon, S. et Pernet, A. (dir), *Explorer le territoire par le projet. L'ingénierie territoriale à l'épreuve des pratiques de conception*, vol. 5, Publications de l'Université de Saint-Étienne, coll. « Espace rural et projet spatial », 2015, p. 9-16.

Larrère, C. et Larrère, R., *Penser et Agir avec la nature. Une enquête philosophique*, Paris, La découverte/Poche, 2018.

Larrère, C. et Larrère, R., *Bulles technologiques*, Marseille, Éditions wildproject, coll. « Le monde qui vient », 2017.

Latour, B., *Nous n'avons jamais été modernes. Essai d'anthropologie symétrique*, Paris, La Découverte, 2006.

Le Mouëllic, A., « Une autre manière d'être architecte : perspectives historiques et réflexions contemporaines sur une pratique de machizukuri au sein du laboratoire de Satoh Shigeru à l'université de Waseda », thèse de doctorat de l'université Grenoble Alpes, 2015, URL : https://tel.archives-ouvertes.fr/tel-01450641

Leroi-Gourhan, A, *Milieu et techniques* (1945), Paris, Albin Michel, 1973.

Leroi-Gourhan, A., *Le Geste et la Parole*, t. 1, *Technique et Langage*, Paris, Albin Michel, 1964 ; t. 2, *La Mémoire et les Rythmes*, Paris, Albin Michel, 1965.

Magnaghi, A., *Le Projet local*, Mardaga, 2003.

Mumford, L. *Technique et civilisation* (1934), Paris, Le Seuil, 1950 ; Marseille, Parenthèses, 2016.

Nakazawa, S., *Earth Diver,* Tokyo, Kodansha, 2005.

Oshima, K. T (dir), *Tectonic Visions Between Land & Sea: Works of Kiyonori Kikutake*, Cambridge, Harvard University Graduate School of Design, 2016.

Pelletier, P., *L'Insularité dans la Mer Intérieure japonaise*, Presses universitaires de Bordeaux, 1995.

Sale, K., *L'art d'habiter la terre. La vision biorégionale* (1985), traduit de l'Anglais par Rollot, M. et Weil, A., Marseille, Wildproject, 2020.

Satoh, S, *Japanese Machizukuri and Community Engagement: History, Method and Practice,* Abingdon-on-Thames, Routledge, 2020.

NOTES

1. 1941年にソウルに生まれた伊東豊雄は、東京大学で建築学を学び、卒業後すぐに、当時「メタボリズム」運動に参加していた菊竹清訓の建築設計事務所に勤務した。当時のこの経験について、伊東は、2016年にハーバード大学デザインスクールで開催された展示会"Tectonic Visions Between Land & Sea:Works of Kiyonori Kikutake et du livre éponyme"でのカンファレンス"What Was Metabolism? Reflections on the Life of Kiyonori Kikutake"と、同名の書籍(*Tectonic Visions Between Land & Sea: Works of Kiyonori Kikutake*, Harvard University Graduate School of Design, 2016, OSHIMA, Ken Tadashi (dir))の中で振り返っている。
2. 1981年5月号の"*L'architecture d'aujourd'hui* (現代建築)"誌の『日本の家』と題された日本特集号において、当時当誌の編集長だったパトリス・グレ氏が使用した表現(筆者注)。「アーキテクト・オトゥール」は「作家性の高い独創的な作品で知られる建築家」を指す(訳者注)。
3. 伊東はこの件について「東北三県に今回建てられた仮設住宅はおよそ５万戸、そのほとんどはコンテナ型をした鉄骨系のプレファブです。それらは性能の悪さでも話題になりましたが、それ以上に気になったのは、均質な住戸ユニットをひたすら並列する非人間的な考え方に対してです。この平等主義、均質主義は仮設住宅に限らず、現在の日本の精神の貧困を表徴しています。しかも各住戸はプライバシーを重んじてか閉鎖性が強く、隣接する住戸とも前後の棟とも全く関係を持つことができないのです。仮設住宅に移ってから引きこもりになってしまった人も決して少なくないと聞きます。」(伊東豊雄、『あの日からの建築』、p.67)と述べている。
4. この釜石市の復興プロジェクトは、東北大学教授であり、アーキエイド(建築家による東日本大震災の復興支援ネットワーク)の重要メンバーであった小野田泰明氏や工学院大学准教授の遠藤新氏と協働して行われた。
5. 坂茂は、2014年にプリツカー賞を受賞している。
6. 坂茂はルワンダ難民のために建設された紙のシェルターで特に有名だが、他にも紙管を活用した技術を用いて複数のプロジェクトを実現しており、2013年に完成したニュージーランド の紙のカテドラル・クライストチャーチ の耐久年数は50年と言われている。
7. 伊東は社会と建築家の関係について次のように語っている。「私は、以前から建築を社会に開きたい、と言い続けてきました。それは自分は社会の外側にいて、外から社会を批判する立場で建築を考えているのではないか、もっと社会の内側に入ってポジティブに建築をつくりたい、とある時から思い始めたからです。現実につくられている建築の多くが

経済優先で動く社会に迎合している事実に義憤を感じるのは今も変わりませんが、だからといって社会批判として建築をつくることにも後ろめたさを感じていました。」(伊東豊雄、『あの日からの建築』、p.66)

8. 塾の教育プログラムの3つの軸については塾のWEBサイトを参照　(http://itojuku.or.jp/about/english)

9. 建築の観点から見ると、ミュージアムは2棟の建物、「スティールハット」と「シルバーハット」で構成されている。「スティールハット」は4つの多面体が連結してできており、「シルバーハット」は伊東豊雄の以前の自邸を復元したものである。

10. 実際に、住民との対話をしようと伊東の塾生たちが2010年から大三島に通っている。学業を終えた後、大三島に移住を決めた学生もいる。

11. プロジェクトを成功に導く使命は、山梨大学を卒業したばかりの青年、川田佑輔に託された。川田は、島で有機栽培の野菜栽培に携わる農業者、林豊の助けを借りて、2014年暮れに土壌の準備を開始し、2015年にブドウの木を植樹した。このプロジェクトには多くの島民の協力を得ている。

12. 瀬戸内海で進行中のほかの活性化プロジェクトと伊東のプロジェクトとのアプローチの違いについてここで指摘しておきたい。他のプロジェクトとして、直島のベネッセコーポレーションの投資による現代美術プロジェクトと、安藤忠雄の建築作品が挙げられるが、このプロジェクトは世界中のツーリストを対象としたカルチャーツーリズムの展開を目指している。

13. 展示会のカタログの英語版から著者が仏語に翻訳: 1. A special area governed by a unique system, made independent from the rest of the world by a spiritual barrier; 2. A place with a direct link with nature; 3. A place where people carry out vibrant activities rather than a mere tourist attraction.

14. この点について、伊東は次のように述べている : "*Sometimes architects are branded egomaniacs who ignore the needs and desires of the client. But I feel that this criticism reflects the lack of communication directed towards filling the gap between designer and client (...) The architect is not necessarily a great humanist by nature and the client is wrong to assign that role to him. Residential spaces must interact with the client, they must stimulate him (...) Within current conditions, in which vast amount of information that make no qualitative returns flood our surroundings, it seems impossible to believe in theories of the act of design. Architecture is rapidly losing its significance in terms of relation with society*"(p.100) . 原文は1971年10月に雑誌「新建築」に掲載(訳者注)。

15. 「日本の生活空間」(CNRS Editions, 2014, pp.305-307 Bonnin Ph. *et al.*)の江口久美とシルヴィー・ブロソーの解説によると、「まちづくり」という表現が最初に使用されたのは1950年代である。

16. フランスで協働的実践の進化に関する主な指標として引き合いに出されるのは、「持続可能な建築」世界賞(*Global Award for Sustainable Architecture*)であろう。プリツカー賞(1979年設立)を受賞する建築作品とは異なり、この賞の選考基準では建築家の社会問題や環境問題への取り組みが評価される。しかし、プリツカー賞が坂茂、最近ではアレッサンドロ・アラヴェナに授与された事実は、これまで主に高名なデザインアーキテクトを指名してきたこの賞の審査機関の選考基準が変化しつつあることを示している。

17. 伊東は、熊本県の建築・都市文化事業「くまもとアートポリス」のコミッショナーとしての立場から、「みんなの家」プロジェクトへの援助をオーガナイザーに呼びかけた。

18. https://transitionnetwork.org/

19. 「プヴォワール・ダジール pouvoir d'agir」の促進の問題は、アングロサクソン系の英語圏で使用される「エンパワーメント(*empowerment*)」の概念が提起する問題に対応する。

20. 2019年9月6日から13日にかけて、ステファン・コルドベス、グザビエ・デジャルダン、マルタン・ヴァニエらによりスリジー国際文化センターで開催されたシンポジウム"La pensée aménagiste en France : rénovation complète ? (フランスにおける近代的開発思考- 完全に刷新するべきか？)"を参照。

21. アメリカのバイオリージョナリズム運動の先駆的研究 (Sale, 2020) および地域主義者団体の研究 (Magnaghi, 2003)を参照。
22. ここでの論理は、ルイス・マンフォードLewis Mumfordが1934年に発表した著作『*Technique et civilisation*技術と文明』(1950 ;2016)において段階的に明瞭に説明したような、科学技術の発展を何よりもまず評価する論理を指す。
23. 著者が「技術的行為」に与える意味は、ラファエル・ラレールの研究と同様に、哲学および人類学分野における様々な研究成果、とりわけジョルジュ・カンギレムGeorges Ganguilhem (*La Connaissance de la vie*, 1965)と、アンドレ・ルロワ＝グーランAndré Leroi-Gourhan (*Milieu et techniques* (1945/1973) or *Le Geste et la parole* (vol. 1 : *Technique et langage*, 1965 ; vol. 2 : *La mémoire et les rythmes*, 1965)に示唆を得ている。
24. ラレール・ラレールはこう明言している「航海術は、期待された結果を獲得するための自然との技術的なかかわりでもある。水先案内人はルートをつくらずに、風と潮の流れと利用しながら港まで船を導く」 (*Bulles technologiques*, p.29) 。さらにこのように強調している「操縦と製作は2つの理想型であり、現実には、この2つの混合体に絶えず出会っている。水先案内は作られたモノを必要とする。農民が農具(鎌、犂やトラクター)を使うように。船もなく、非常に複雑であり得る作られたモノを使うこともなく操縦できる水先案内人はいない」 (*Bulles technologiques,* p.30)。
25. 都市中心主義的アプローチの概念は、フランス国立高等建築景観学校のテーマ別研究学術ネットワーク「農村地帯と空間プロジェクト」において説明されている(Guillot, X., « Espace rural et projet spatial : un défi professionnel à relever » dans Guillot, X., *Espace rural et projet spatial.Réflexions introductives, stratégies pédagogiques*.Publications de l'université de Saint-Etienne, 2011, p.10-17).
26. ここでは、領土開発整備省庁間委員会 (CIADT)によるアクションを踏まえ2000年代中盤に登場した「地域エンジニアリング」の概念に言及しておきたい。参照資料 :Landel P.A., 2007, Entre politique publique et action publique : l'ingénierie territoriale.In :Faure A., *et al.*, (col.), *Critiques de la territorialisation, les politiques publiques à l'épreuve de l'action locale*. pp.117-122.

RÉSUMÉS

不動産バブルの崩壊、人口減少、神戸と東北の2つの大震災など、過去数十年の間に日本に起こった数々の重大な出来事は、日本の経済、社会、環境に大きな影響を与え、この国の脆さと不確かさを顕わにした。このような状況を背景に、伊東豊雄は、近代的思考に基づいた空間プロジェクト実践への批判を起点として大きく変容していった。この変容を証言する東北地方と瀬戸内海における伊東の2つの活動－東北地方での「みんなの家」プロジェクトと、瀬戸内海・大三島での、島の新たなライフサイクルの推進プロジェクトーが、本稿では分析される。これらの活動で伊東が実行したプロジェクトは、住民や地域のアクターと専門知と技能を共有しながら設計し、最適化された経済手段によって実現させるアプローチに基づいており、伊東と社会そして技術とのかかわりの独自性を例示している。そのアプローチはまた、空間とプロジェクトにかかわる様々な領域の知の境界を疑い、超えていくことを提案するアプローチでもある。

In recent decades Japan has experienced major economic, social and environmental events. As evidence of the fragility and vulnerability of this country it has undergone a bursting of a real estate bubble, demographic decline, and two earthquakes, one in Kōbe and the other in Tōhoku. It is in this context that the career path of the architect Itō Toyō underwent a remarkable change

which was set off by a challenge to prevalent modern thinking in the practise of spatial design projects. Two actions carried out in the Tōhoku region and in the Seto Inland Sea which bear witness to this are analyzed in this article: one concerns the construction of a community house, the other concerns the regeneration of an island community: Omishima. These actions illustrate a singular "social and technical approach" in project management: one based on the sharing of skills with the inhabitants and local actors in the design process, and the other resorting to an economy of means in the implementation of the project. It is also an approach that questions the boundaries of knowledge in the disciplines of spatial and project design and proposes to extend beyond their scope.

INDEX

Keywords : participatory design, mediation, ecological transition, social responsibility, resource, territorial regeneration
キーワード : 参加型設計、メディエーション、エコロジカル・トランジション、社会的責任、資源、地域再生

AUTEURS

XAVIER GUILLOT グザビエ・ギヨ

建築家、ボルドー国立高等建築景観学校教授、UMR Passages所属研究員、テーマ別学術研究ネットワーク「農村地帯と空間プロジェクト」主宰(2008年設立)。
xavier.guillot[at]bordeaux.archi[dot]fr